



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.178
2018.7.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

加曾利B式土器

— E.S. モースと坪井正五郎のはざまで —

鈴木 正博

● 第22回 ● 「器物形状の一致」との対峙へ

現代考古学の学びとしての「コロボックル風俗考」は、連載に要した全国規模の考古資料の観察と比較、及び風俗のテーマ性と遺蹟・遺物の選択眼において計り知れない展望を内包している。本連載では加曾利B式に限定した形態学を瞥見したに過ぎないが、「コロボックル風俗考」が日本考古学の発達過程において如何に非連続的な上昇飛翔を展開しているかが伝わり、小気味よい。

坪井正五郎が西ヶ原貝塚報告で範を示した本邦初の「分析考古学」は、特徴ある形態の精緻な分類と類似資料の全国的な分布調査、及び全ての土器片を対象とする形態と「紋様」の統計分析という新機軸から構成される学術基盤であり、モースの形態学を本草学から容易に超克し、往時の最先端統計学を駆使する等沈黙の学史として重要である。それにも拘わらず西ヶ原貝塚報告を(未完)で中断せざるを得ないのは、並行して報告される人類学教室の発掘成果に観る全形と部分の一体的相関を踏まえた新たな形態学的視点との遭遇が想定され、椎塚貝塚等多くの完形土器との対峙から、西ヶ原貝塚の分類をより深化させた「類似の形態連携論」を見出したからである。

即ち、西ヶ原貝塚における土器群の分析構成は、質的類似と量的傾向という独立した相補関係による破片に観る全体俯瞰は成し得るものの、土器群の一体的関係であるべき本来の姿へと導く統合的な形態構造を導くまでには至っていない。端的に言えば、西ヶ原貝塚では数量的に目につく土器片を特徴づけることを目的とする「土器様式名称」を考案するものの、そこには突起の分類で示された個別の精緻な分析成果が一切反

映されない、という不本意な状況も顕著である。これを打破するには当時議論された「大森式」や「陸平式」であろうが、「西ヶ原様式」であろうが、統計的な傾向に基づく曖昧な傾向比較ではなく、「コロボックル風俗考」第九回で示す「起源」への黙示的な全体配置に観る流れが雄弁に語るように、個別具体的な類似分析こそが新たな展望を拓く方法であることに改めて逢着したと言える。

こうして把手・突起は単なる統計標本である以上に、「コロボックル美術の標本たるの価値充分なり」へと分析対象たる価値判断を高め、観察すべき対象は美術標本とし、それは即ち、制作する「ヒト」への接近であり、遺物を通して「ヒト」から更に社会・風俗へ、と視座が高次化される。

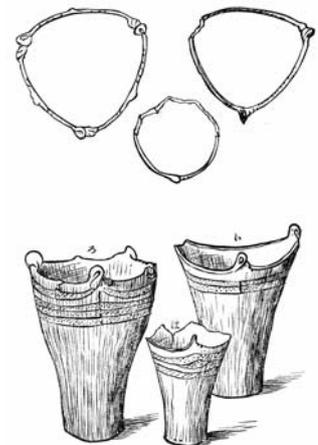
さて、「コロボックル風俗考」が明治29年2月に完結するや、その直後の4月には「異地方発見の類似土器」が発表される。明治28年11月の「北海道石器時代土器と本州石器時代土器との類似」は地域間を連繋させる目的の類似現象であるが、「異地方発見の類似土器」は「コロボックル風俗考」の「起源」配置を抜本的に見直し、類似度として更なる精確さを穿つレベルである。

第27図は「異地方発見の類似土器」のプロローグ図版で、(い)は第21図の陸平貝塚例、(ろ)は第26図の椎塚貝塚例で共に茨城県霞ヶ浦沿岸、(は)が福島県田子沼で猪苗代湖周辺の例である。関東と東北という異地方のこの3例に観る完形土器としての類似は、北海道—東北の形態連携に更にコロボックル連鎖する東北—関東の形態連携に止まらず、新たな類似議論を展開する。

その前提条件として3単位突起とその上

面観を含む形態(特に(い)と(ろ)は「縁部に在る小キザミ迄一致」)の類似に加え、「胴部の模様は何れも全体を三分した最上の一部に限って居て、夫も帯形と定まって居ります。(中略)帯の数と配置とは此の如き相違がございますが、」と若干の違いを示した上で、「右上の方より左下の方に走る席紋」を以て飾って居る点に於ては全く同様でございます、(い)と(ろ)の底面には等しく網代形編の物の跟が付いて居ります。」との「模様」・「席紋」・底部圧痕文に至る類似と僅かな違いを総合的に確認すると共に、愈々極め付きとして「類似の最も著しいのは縁部に付いている突起でございます」と結ぶのである。

畢竟、第27図は「器物形状の一致」の「決して暗合や必然を以て説明することの出来ないもの」の多くの事例の一例で、「製造人が一つ」あるいは「模写の原品が一つ」としか「解釈が付きません」とすべき課題となり、新たに「コロボックル美術」の突起に観る立体的類似性と対峙する。



▲第27図 「異地方発見の類似土器」プロローグ図版

※巻頭連載は隔月です。次回は太田裕さんです。

目次

■加曾利B式土器 「器物形状の一致」との対峙へ(第22回) 鈴木正博 …1
■考古学の履歴書 ことのはじまり(第15回) 間壁忠彦・間壁霞子 …2

■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト(第171回) 阿南翔悟 …3
■考古学者の書棚 『天下統一と城』 永恵裕和 …4

考古学の履歴書

ことのはじまりー「..それでは 何だ」(第15回) ————— 間壁 忠彦・間壁 霞子

4. 石棺の石材(6)

前回最後に述べた、組合竜山石の家形石棺を納めた岡山市八幡大塚古墳は、岡山市街地南に横たわるいわゆる吉備の児島の地で、かつての児島の北岸を通る瀬戸内航路を、眼下に見る地を占めていた。そこは同時に瀬戸内から旭川経由で、備前中枢への入り口を扼する地点でもあった。この旭川を遡り岡山市街地の北端ともいえる地点にあるのが牟佐大塚である。この古墳の石棺が浪形石であった。石材産地からは、50kmばかりはあるだろう。棺は恐らく岡山県西部の小田川から高梁川を経由し、児島の北岸の瀬戸内海を通り旭川を遡って運ばれたものだろう。この牟佐大塚の石棺は、浪形石石棺の中では棺形態は新しく、当時は既に、児島から北の瀬戸内航路を眼下にした、竜山石石棺を収めた八幡大塚が築かれていたと思われる。

竜山石の石棺は古墳時代の中期、主に大王やその関係者としての葛城氏の墓を思わす古墳で、長持形石棺として使用され、その棺形態はあたかも近畿地方の大王権象徴のように各地にも点在もしていた。だがその後、『記紀』の世界では河内に拠点位置を置いた応神・葛城系王朝の断絶、継体擁立から欽明期への間に、対外的には朝鮮半島各国との交流や抗争、国内では、吉備や九州での反乱が語られる。古墳の中では、大きく石棺形態も家形へ、いわゆる古墳時代後期となり、古墳自体も格差を示しながら膨大な数構築されるのは常識だが、横穴形態とは言え各地での特性をも強くしてくる。

しかしその中でも、かつて大王・葛城一族の象徴ともなった竜山石製の棺は、象徴的に王権や葛城氏、またその組織と関係するものの棺として地方に運ばれたと思われる。

『記紀』の両書には、吉備反乱の原因などを作ったと語られる雄略天皇の、葛城山での狩の逸話も載せる。『古事記』では、雄略は狩りの場で出会った、自分と全く同じ姿で従者を従え行動をするものを、葛城の神「一言主」と知って、自分の持ち物、従者の衣服まで脱がして捧げ、神と手打ちをする。『日本書紀』では同様な場面で葛城の神を「一事主」とし、「長人」とし「仙」に出逢ったような行動をする。「雄略紀」全体の中では、葛城氏勢力を削ぐ行動の顕著な内容の中でも、なお葛城は大王と同等の象徴的力のあったことの消し去れない歴史でもあろう。

「欽明紀」の17年には、蘇我稻目を備前児島に遣わして、児島屯倉を置き、葛城瑞子を田令とする、とある。こうした記述をそのままに、八幡大塚を葛城瑞子の墓といえるほど、簡単ではないが、少なくとも6世紀に入ると、吉備の児島には近畿勢力の拠点があったと思っている。ただ蘇我氏自体は、まだ竜山石を棺に使用できていないようだ。以前より蘇我馬子の墓とされる奈良の石舞台では、二上山の凝灰岩白石片が出土しており、近年では石舞台に近接した都塚古墳が、馬子の父である蘇我稻目の墓とされるが、ここに収まっている刳抜家形石棺も二上山の凝灰岩白石である。

ところで『日本書紀』では稲目の娘であり馬子とは姉弟(?)でもある堅塩媛は欽明妃の一人で、用明・推古の母。「推古紀」20年に、欽明の墓に皇大夫人堅塩が改葬されたとある。奈良の橿原市(見瀬)丸山古墳がその墓ではないかとの推測は古くよりよく知られるが、中の刳抜家形石棺二基ともが竜山石と確

認されてからも、既に4半世紀と言えよう。丸山古墳が真に欽明・堅塩の墓ならば、蘇我氏は実質的にこの時、主張していたように葛城氏本流に転化したといえるだろう。

蛇足ながら、1991年この古墳に少年が偶然入れたことから、1992年には宮内庁書陵部による調査が行われ、1994年に『書陵部紀要 45号』で報告された。その間幾人かの考古学関係者は、古墳内部の実態は知りえた状況だったようだ。前から触れている間壁忠彦著の『石棺から古墳時代を考える』は1994年1月発行だが、この本は1993年には入稿している。本文中では、内部が調査されながら、私たちには石棺は見られない思いを書いている。幾度も幾度も大和に足を運んだ私たちには、この古墳の石棺石材が如何にこの時代の政治性を映すものか、二人で話し合った日々を思い出す。

吉備に戻ろう。児島で竜山石石棺埋納八幡大塚眼前の海上を、吉備勢力の示威のように牟佐大塚の主のための、地元石材の棺が運ばれたこともあったと思っている。

しかしこの頃からは、吉備津神社の裏山である中山、山頂には吉備津彦の墓として陵墓参考地となった中山茶臼山古墳(長約120m・前方後円墳)もある。一帯には後期古墳が点在し、刳抜2基・組合1基の竜山石石棺がある。岡山平野でも、牟佐大塚とは南の低い山丘を隔てた近い地点に、竜山石の刳抜家形石棺を納めた唐人塚があるがこの古墳に接しては、飛鳥時代に初源があり、白鳳から奈良時代を通じ整備された壇上積基壇を持つ賞田廃寺がある。この基壇は白色の凝灰岩で築かれており、香川県の火山系の石材と思えた。

なお備前南部では他にも、岡山平野にも赤磐市・瀬戸内市にも竜山石家形石棺はある。しかし造山・作山の両巨墳のあった周辺の備中では、浪形石の石棺で、竜山石石棺は終末期古墳の竜山石を刳り抜いた横口式の、1基だけしか知られてない。

こうもり塚・牟佐大塚と並んで、岡山の3大横穴石室墳の一つ、倉敷市真備町の箭田大塚は、時期・規模共に他の2大塚と甲乙付け難い、しかも2大塚より浪形石産地には一番近い位置にある。しかしこの古墳では、自然石材による数個の冪状遺構が残るのみである。この古墳は、吉備真備の祖先達の墓として、最も合理的な墓とも考えられる。石棺石材の示す世界は、地方においても複雑な様相を示している。

間壁忠彦 略歴

1932~2017年 岡山県児島郡甲浦村(現岡山市南区)郡に生まれる
1951年 岡山県立操山高等学校卒業
1955年 岡山大学法文学部法学科卒業
1954~1973年 (財)倉敷考古館学芸員
1973~2006年 同上館長
1968~1998年 広島大学、1968~1980岡山大学非常勤講師(博物館学)、他に熊本・九州・愛媛・鳥取・千葉大学へ博物館学非常勤講師出講
1982~2005年 就実女子大学非常勤講師(考古学)、ほかに島根大学へ考古学非常勤講師出講
2006~2015年 (財)倉敷考古館学術顧問

間壁霞子 略歴

1932年 岡山市門田屋敷(現岡山市中区)に生まれる
1951年 岡山県立操山高等学校卒業
1955年 岡山大学法文学部史学科(日本史専攻)卒業
1955年 岡山大学法文学部副手(池田家文書整理)
1956~2015年 (財)倉敷考古館学芸員
1979~1986年 中国短期大学非常勤講師(歴史学)
1985~2004年 神戸女子大学非常勤講師1年を経て助教授(1991年まで)教授(2004年まで)、以後同大学名誉教授
1995年 明治大学で論文博士(歴史学)

隔月連載です。次回は井川史子先生です。

Jレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 171

綾羅木郷台地遺跡 ～山口県下関市

阿南 翔悟

私のマイフェイバレットサイトとして自らが調査を担当し「土笛」が出土した綾羅木郷台地遺跡(庄屋敷地区)の調査についてご紹介したい。

綾羅木郷台地遺跡は竜王山と四王司山をそれぞれ源流とする綾羅木川と砂子多川によって形成された下関市域最大の沖積平野である綾羅木(川中)平野の北側に位置する洪積台地の西端部に立地する。主な遺構として1000基以上の貯蔵穴とそれを取り囲む溝が検出され、弥生時代前期の西日本でも有数の規模を誇る拠点的な集落遺跡として知られる。

遺跡の存在が広く知られるようになったのは、昭和40年代前半、遺跡内で計画された工業用鑄型の原材料となる珪砂の採掘事業に端を発する。事業に伴い調査が実施され、遺跡の重要性が認知されるなか、珪砂の採掘を急ぐ事業者が遺跡の一部を重機によって破壊するという事件が起きた。事件は報道等で大きく取り上げられ、事件を契機に異例の保護措置として国による史跡の緊急指定がなされ、遺跡範囲の一部が国史跡「綾羅木遺跡」として指定された。

経済が発展して産業開発が急速に進められる中、遺跡保護の在り方を世に問い、その後の文化財保護行政の在り方を変える契機となった、学術的な価値以外にも重要な意義を持つ遺跡である。

その後も圃場整備や個人住宅建設などの開発に伴い調査が実施され、指定範囲外についても集落の全体像を示す資料が蓄積されつつあるが、未だに居住空間である住居が検出されていないなど、課題は依然として多い。

そして、私が下関市に入庁してから初めて調査に関わったのが、綾羅木郷台地遺跡(庄屋敷地区)だった。対象地は遺跡範囲の東側に位置する。集合住宅の建設に先立ち遺跡の分布状況を確認するため調査を実施した。

自らが主担当になった初めての現場で思い通りにいかないことばかりだったが、主な遺構として弥生時代前期の溝2条が検出された。検出された2条の溝はそれぞれが小丘陵の縁辺部と谷状地形に沿って掘削されることから、地形を利用した区画溝と想定される。

その谷状地形に沿って掘削された溝の掘削中に「土笛」は出土した。その時のことは鮮明に記憶に焼き付いている。作業員と呼ばれて向かうと、作業員が指さす先に弥生土器片に紛れて

卵状の土製品があった。不勉強な私はこれがなんだか分からず先輩にみてもらったところ、先輩がポツリと一言。「はは、土笛が出てら」と。

土笛は昭和41年に綾羅木郷台地遺跡において初めて出土が確認された遺物である。当時、綾羅木郷台地遺跡の発掘調査に関わっていた国分直一氏が中国の陶埴との類似性を指摘し吹奏機能を持つ楽器「陶埴」として昭和42年に世に紹介したことにより、広く存在が知られるようになった。発見当初は陶埴とも呼ばれたが、現在では弥生時代の「土笛」の呼称が一般に定着している。

その後の調査でも土笛の発見は相次ぎ、現在まで市内からは庄屋敷地区で出土した土笛を含め計8点が出土し、全国的には山陰地域を中心に100例以上の出土が確認されたが、近年実用品としての評価に疑問が示されるなど、評価が定まっておらず検討課題の多い遺物である。

また、そんな学術的な評価とは別に国史跡「綾羅木郷遺跡」の保存に関わった人々にとって「土笛」は特別な遺物である。綾羅木郷台地遺跡の調査では山陽西部の土器編年の基準資料である綾羅木式土器をはじめいくつもの重要な発見があったが、土笛が初めて出土したときの様子は国分氏が編集した雑誌「えとのす」の綾羅木郷台地遺跡発掘調査の特集の中で詳細に記されるなど、土笛の出土が当時調査に関わった人々の間で数ある発見の中でも鮮烈に記憶に残っていたことがわかる。

土笛はユニークでどこかユーモラスな造形で市民に親しまれ、綾羅木郷台地遺跡を象徴する遺物となり、私が入庁する2年前には「土笛」をモチーフにした下関市立考古博物館のマスコット「ぶえ吉」が誕生した。

奇しくも、庄屋敷地区の調査を実施した年は国史跡「綾羅木遺跡」の調査と保存を契機として設立された下関市立考古博物館開館20周年を迎えていた。記念イベントとしてシンポジウムや特別展が開催されたが、遺跡の象徴的な遺物である土笛が出土したことでシンポジウムでは土笛についてのパネルセッションや、出土した土笛を特別展に急遽展示するなど、イベントはより賑やかなものになった。

そんな節目の年に綾羅木郷台地遺跡の調査に関わり土笛が出土したことについて、自分でいうのは恥ずかしいが遺跡との不思議な縁を感じずにはいられない。下関市に入庁してすぐに綾羅木郷台地遺跡(庄屋敷地区)の調査を担当し、調査終了から3年経った。まだまだ未熟で先輩方に迷惑をかけてばかりで心がくじけそうになることもあるが、入庁してはじめての現場で感じた縁は忘れられない。

これまで下関には縁もゆかりもなかった私ではあるが、来た途端に大切な出会いに恵まれた。この縁を胸に下関市の文化財保護行政に関わっていきたい。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは山根謙二さんです。



▲綾羅木郷台地遺跡(庄屋敷地区)出土土笛
写真出典：下関市教育委員会2018
「下関市埋蔵文化財年報 8」より



▲下関市立考古博物館公式マスコット「ぶえ吉」
写真出典：下関市立考古博物館公式マスコット「ぶえ吉」公式facebook より

考古学者の書棚

「天下統一と城」

国立歴史民俗博物館編／読売新聞社（2000）

永恵 裕和

来し方30年を超える有耶無耶の中には、今から思えばターニングポイントだった出来事がたくさんあったことに気づく。まずは、考古学・日本史学の区別もついていなかった中学時代の思い出語りから始めたい。

当時、文化系のクラブに所属していた私は、課外活動の一環で兵庫県立歴史博物館へと出かけた。うららかな春の陽気の中で、遠くに姫路城を眺めながら、収蔵資料を時間の許す限り見てみよう。そんな遠足気分の私は、受付で目に止まった案内に心を奪われた。そう、それが特別展『天下統一と城』との出会いであった。

今でも展示を見た時の感動は忘れていない。石垣や堀を塗り分けた浅野文庫諸国古城之図、出土したとは思えないきらびやかな金箔瓦、初めて見る信長・秀吉文書。

なかでも度肝を抜かれたのは長野城の復元模型だ。図録によると、1.8m×1.4mとサイズが大きかったこともあるが、なんとといっても畝状堅堀群の密集度に驚き、「こんなハリネズミのように防御を行なった城が世の中にあるのか!」と素直に感動した（実際、等高線に直行する畝状堅堀群が城域全体に広がるため、本当にハリネズミのような見た目となる）。

実物、複製品、模型など、様々な展示品の持つ魅力に圧倒され、課外授業の時間はあっという間に過ぎ去った。少しでもこの感動を持ち続けたい、と思って購入した特別展の展示図録が、今回紹介する本である。本書の目次を引用しよう。

総論 天下統一と城 ー展示の目指すものー

第Ⅰ章 中世の城と館

第Ⅱ章 城と戦い

第Ⅲ章 安土城と織豊系城郭

「天下統一と城を考える」

総論は、展示企画者の千田嘉博氏による、趣旨説明である。「ある地域にどのような城が出現し得たか、ということは単に軍事的な意味を越えて、それを生み出した集団や社会のあり方を反映したものとして読み取ることができます」という一文には、本展示が単なる名城特集展ではなく、戦国期から江戸期の社会を城館の変化から読み解いていくという強い意気込みが端的、かつ鮮明に示されている。

第Ⅰ章～第Ⅲ章までは、展示品解説とコラムとなっている。第Ⅰ章では、室町幕府の拠点である花の御所を模倣した平地方形館が、守護の分国への下向とともに各地に出現し、次いで彼らの地域内での政治的・軍事的成長に伴い、戦国期にはいわゆる山城が簇出していく様子を概観する。ここで重視されるのは、築城主体がどのような社会的な規範の影響下にあったか、あるいは家中の権力構造をしていたかが、城館の平面構造に現れるという視点である。

第Ⅱ章では、城館を戦いの中に位置づけ、前章までで見た社会のなかで、特に戦国期から織豊期にかけての城館の構造の変化を、鉄砲や戦闘の大規模化の影響と捉える。さらに一般に武

士階級のみで終始しがちな戦闘に、籠城戦というキーワードを通して、非戦闘員や戦乱に巻き込まれる住民の存在を指摘する。

第Ⅲ章では、千田氏の業績に依りながら、安土城の画期性、織豊政権の全国統一を背景とした築城技術の波及、近世封建制社会を体現した近世城郭の成立を概観する。そして、江戸城を天下統一とともに発達した織豊系城郭の集大成と位置づける。

「天下統一と城を考える」は、永原慶二氏ほかによる短編寄稿論文である。各論者によって、論文の枠組みは異なるが、いずれも城館だけではなく、その背後に見える社会構造について言及している。この章については、その後の講演会も含めた論集『天下統一と城（歴博フォーラム）』（塙書房）に再録されている。

以上のように、特別展図録とはいえ、本書に掲載・収録されている展示品や解説は、中世から近世を城館の変化から一体的に通覧するものであり、城ブームの未だ起こっていない、当時の歴史系・考古系の展示では空前の（絶後ではない）内容であった。

これをきっかけに、「お城って、いろんなことを考えることができて楽しいな。」と感じた私は、その後大学生となり、サークルでは城郭研究部、専攻では考古学研究室、研究では城郭談話会の門を叩き、埋蔵文化財行政の道へと進むこととなるが、当時の私には知る由もないことであった。人間、何がきっかけで、今の自分ができあがるかわかったものではない。

さて、この原稿作成時点で、兵庫県立考古博物館では特別展「兵庫山城探訪」を開催している。国史跡に指定された山城を中心に出土品や縄張図とともにその見どころを紹介し、実際に山城に登る楽しさを伝える内容となっている。講演会は毎回満員で、質疑応答でも各人の踏査経験や事前知識による熱いやとりが行われていた。

お城ブームの影響もあるのだろうか、この関心の高さは一体何だろうかと思う。やはり「お城が好き」「戦国武将の生き方を学びたい」等々なのだろうか。

全国各地に古墳や窯跡、集落遺跡は数多くあっても、それらは、博物館に行く、堅穴住居の復元に参加するといった、何らかの「しかけ」がなければ、普段の生活からは少し遠い存在なのかもしれない。

一方で、城館跡は、観光地として訪れる、大河ドラマなどを視聴するなど、近年ではその他の遺跡よりも情報を得やすくなっている。さらに、地域の方々による歴史語りで話題となることが多く、「しかけ」がなくとも城館跡は、程度の差こそあれ、比較的生活に身近な存在となってきているように感じる。

このままいけば、もしかすると、城館跡は、遺跡の中でも「今の自分を含めた地域の歴史」に直接触れることができる遺跡として、地域に元気と誇りを与える重要な資源になるのではないかな。そんな想いを弄びつつ、掲筆することにする。

アルカ通信 No.178

発行日 2018年7月1日
 企画 角張淳一(故人)
 発行所 考古学研究所(株)アルカ
 〒384-0801
 長野県小諸市甲49-15
 TEL 0267-25-0299
 aruka@aruka.co.jp
 URL : http://www.aruka.co.jp